学校を創る

館山小学校の挑戦

館山市立館山小学校長　相良（さがら）　和久（かずひさ）

1　はじめに

本校は総学級数19学級（通常の学級が全学年２学級の12学級、特別支援学級が７学級）、全校381名（４月12日現在）の中規模校である。

本校は平成14年度から３年間、文部科学省から「学力向上フロンティアスクール」の指定を受け、国語科と算数科を中心に基礎学力の向上に取り組み、平成16年度に公開研究会を実施した。その際、「子供たちが落ち着いた学校生活を送るためには、学校生活の大部分を占める授業の充実においてほかならない。そのためには、教師は絶えず授業の向上を目指し、研修を進めていこう。」と、翌年度からは、子供は学習力、教師は授業力の向上を目指し、国語科・算数科・特別支援教育を中心に「授業力向上実践研究会」として、公開研究会を継続開催している。

2　毎年２回の公開研究会の開催

自主公開研究会を継続して実施してきた目的の一つに、教師自身の「授業づくりの過程で授業改善のモチベーションを維持していくこと」がある。サブテーマに「子供に学習力を！ 教師に授業力を!」を掲げ、子供の学習力を向上させるためには、我々自身が常に向上心を持つことが大切であり、「教師の授業力を向上させ、質の高い授業を行う」ことが、私たちの目指す子供像の具現化には欠かせないものであると考えた。つまり、公開研究会を核にして、それに向けて日常的に授業力の向上を図っていくこと、またそのことを継続的に行っていくことが子供の学習力を向上させ、「進んで学習する子供」を育成することにつながると考えている。

かつては子供たちが不安定だった時代もあったが、継続公開を行うことにより、子供たちが落ち着いて授業に臨む雰囲気が醸成され、現在は学校全体が安定している。

3　子供たちへの学習支援体制づくり

授業を基本としながら、子供たちの基礎的学力の向上と自ら学習に向かう意欲を高めるための様々な取組を行っている。

⑴学力ケアプロジェクト（算数道場）

算数の計算領域において、確実に身に付けさせることを目的として行う教育活動であり、給食準備の時間に各学年の算数ルームにおいて個別支援を行っている。

⑵国語・算数チャレンジタイム

授業で学んだものを確実に習得させるため、朝の会終了後の10分間をプリント学習の時間としている。復習のための基礎学習（表面の問題）とチャレンジ問題（裏面の問題）を用意して取り組ませている。

⑶基礎・基本の時間　※３年生以上

１月と２月に習熟度別で計算力の強化に取り組んでいる。６時間目に位置付けることで、学級担任と１、２年の教師や専科の教師が連携して学力向上を目指している。

⑷漢字・計算の習熟の取組

当該学年の漢字・計算の確認テストを２月に全学年で取り組み、当該学年で身に付けるべき漢字・基本的な計算の習熟を図っている。

⑸レベルアップ講座（５年生対象）

千葉県標準学力検査を終えた３月の約２週間、５年生で特別日課を組み、国語・算数を中心に、総復習や演習に取り組む。次年度の全国学力学習状況調査も踏まえ、プリントを使いながら学力向上を目指し、複数体制で指導に当たっている。

⑹学習競技「甲子園・検定プロジェクト」

４年生以上が参加できる学習競技（漢字・計算・地図のテスト）を行っている。学年の枠を取り払い、同じ条件で競うため、高校野球になぞらえて「甲子園」と命名した。事前に出題範囲を示し、子供が自主的に学習に取り組めるようにしている。また、各テストとも全問正解の子供には「博士」の認定証を授与し、意欲の向上を図っている。特別支援学級も独自の甲子園・検定を行い、子供の学習意欲の向上につなげている。

地図甲子園に挑戦中の子供たち

４　今年度の本校の挑戦

⑴教科担任制を意識した取組

３年生以上の各２学級に対して、年間を通して一人の担任が１、２組の算数、もう一人の担任が国語を受け持つことにした。また、道徳も二人の担任が協力しながら授業を行うこととした。これにより教材研究の負担軽減を図るとともに、学年の子供たちを複数の目で見ることができるようになる。低学年も図工・音楽等を担任が協力しながら教えるようにした。

さらに、本校は体育の免許を有する教師が多く、１、２年生の体育の１時間分を専門教師が持ち、担任以外の視点で教科経営を行う。

⑵校長による取組

①校長による各種の教室

走力や投力の向上を目指して、朝、昼の時間を使って陸上教室やボール投げ教室を開催している。昨年度は陸上教室を４年生以上の希望者、ボール投げ教室は３年生以下の希望者により約３週間程度開催、両教室とも学級の半分以上が参加した。

②道徳の授業への校長の参加

４年生以上の道徳の授業に年間３回以上参加している。担任にも良い刺激となっている。

道徳の授業への参加

③式辞は子供たちの顔を見ながら

各種の式において、校長の思いが子供たち一人一人に伝わるように、原稿を見ずに子供たちの顔を見ながら熱意を込めて語りかけている。

卒業式にて

５　おわりに

昨年度から、職員には「当たり前を捨てよう」と話している。今までより、これからである。今年度も教職員一丸となってこの状況を見据え、様々なことに挑戦していきたい。

学校を支える

すべては子供たちの笑顔のために

匝瑳市立八日市場小学校教頭　竹澤（たけざわ）　勲（いさお）

1　はじめに

本校は、明治６年開校の歴史と伝統のある小学校である。自然豊かな匝瑳市の中心部に位置し、地域から愛され、大切にされている。

そんな伝統ある八日市場小学校に、感染症拡大防止のための臨時休校が続いていた昨年４月、新任教頭として赴任した。

校長に「教頭としての在り方」についての教えを仰ぎ、教職員に支えられ、保護者や地域の方々の理解と協力をいただきながら、何とか毎日を過ごすことができた。

昨年度の１年間は、まさに新型コロナウイルスとの戦いであった。私は教頭として、感染を防ぐために学校がやるべきことや、実施を断念せざるを得ないことの模索を重ねた。

本稿では、昨年度、八日市場小の教職員とともに「チーム八小」として新型コロナウイルスと戦った取組の一端について述べたい。

2　教職員全員でコロナ対策を考える

感染を防ぐために、「何をすればよいのか」「何をしてはいけないのか」については、誰も正確なことは分からず、誰もがこれまでに経験したことがない。

そこで、校内で「新型コロナウイルス感染症対策委員会」（通称「Ｃ対」）を４月のスタートと同時に発足させた。Ｃ対は校長、教頭、教務主任、学年主任、養護教諭等で構成され、私は会議の充実のためのファシリテーションに徹した。会議の目的を確認した上で、休校期間中の対応や学校再開後の対策等についてメンバーでアイデアを出し合い、決定したことを全職員で共有し、共通理解を図った。

Ｃ対の開催は、昨年度の１年間で14回を数える。Ｃ対を通じて、未知のものに対応するときこそ、管理職のトップダウンではなく、教職員全員で考え、チームで対応することの大切さと有用性を実感した。

3　できることに集中し、質を高める

校長は「できないことを数えて悲観するのではなく、できることに集中し、質を高めよう。」と常日頃から私たちに話した。

昨年度は、修学旅行、各種の大会や発表会、地域の祭事など、多くの行事や催しが中止となった。当たり前のようにできてきたことができなくなってしまうのは、児童も保護者も私たち教職員も残念で悲しい。しかし、悲観してばかりでは前に進めない。私は校長の助言を基に、「今だからこそできることは何か。」「できるためにすることは何か。」と、職員室で話題に出し、皆でアイデアを出し合った。

一人でアイデアを生み出すことは容易ではない。しかし、皆で考えるとアイデアが生まれやすくなり、より洗練された内容となる。これこそが「チームとしての学校」の本質なのかもしれない。

以下に、本校の教育活動の一例を紹介する。

⑴地域の独居高齢者との交流

本校はこれまで、児童が育てた花を地域のいろいろな施設にプレゼントするなどの交流活動を行ってきた。昨年度はそれに加えて、

地域の一人暮らしのお年寄りにも花をプレゼントした。この活動は、児童のアイデアから生まれたものである。「コロナ禍で、お年寄りは外に出る機会が少なくなっているのではないか。」「特に一人暮らしのお年寄りは、人と接する機会がなくなってしまっているのではないか。」と児童が考え、担任と相談し、「自分たちが暮らす地域の皆さんを笑顔にしたい。」という目的の下、一人暮らしのお年寄りに花と手紙をプレゼントする計画を立てた。

また、児童がその計画を匝瑳市の市民提案型事業に提案したことで、市から活動のための助成を受けることもできた。

匝瑳市へ計画を提案する児童

お年寄りの自宅を訪問する際には、市の社会福祉協議会や区長さんに案内いただくなど、地域の方々の協力も得ることができた。

児童は「マスクを付けて、感染症に気を付けてください。」「電話詐欺に気を付けてくださいね。」「健康で長生きしてくださいね。」と声を掛けながら花と手紙を渡し、多くのお年寄りに喜んでいただくことができた。

お年寄りへプレゼントを渡す児童

⑵卒業式

様々な行事が中止となってしまったからこそ、私たち教職員は「６年生の心に残る卒業式にしたい。」という思いを強くもった。

そうした思いの下、教務主任や６年生担任、情報主任とともにアイデアを出し合った。

その結果、卒業生と保護者の席を近くに配置して、校長が卒業生の座席の傍まで行き、一人一人に卒業証書を渡すことで、保護者が卒業証書を受け取る我が子の姿を間近で見ることができるようにするとともに、在校生によるお祝いのビデオメッセージを放映するなど、制限のある中でも工夫を凝らした卒業式を実施することができた。

卒業生と保護者が近くに座れるよう工夫

このように、「できることの質を高める」ことを通して、学校の在り方や日常、行事等の「本質」に触れることができた思いである。

４　すべては子供たちの笑顔のために

感染症対策を行いながらの教育活動は、今後も一定期間続いていくことであろう。配慮すべきことも多く、また制約も多い。

しかし、どんな環境下にあろうと、私たち教職員の「すべては子供たちの笑顔のために」という信念が揺らぐことはない。

これからも、八日市場小の教職員が「チーム八小」として職務に当たることができるよう、校長の教えの下、教頭としての私の職責を全うする所存である。

学校を動かす

学校教育目標の実現を目指して

我孫子市立我孫子第一小学校主幹教諭　岡田（おかだ）　恵理子（えりこ）

1　はじめに

本校では、校長のリーダーシップの下、学校教育目標の実現を目指し、全職員が最大限の力を発揮している。主幹教諭である私は、研究主任と特別支援教育コーディネーターとして、「自分らしく、気持ちよく」をキーワードに学校運営に関わっている。

2　チーム一小

⑴「一小大好き」をコーディネート

私は密かに、児童や職員が「うちの学校はいい学校！」と思うように仕掛けをしている。

地域の情報を校内に広めるために、研修室を「我孫子の情報発信室」とし、資料を集めたり、成果物を保管したりしている。また、学校の成果を地域に広めるために、「広報あびこ」への掲載や公共施設への展示等を行った。私は、「素晴らしいこと」をアピールする機会を意図的に増やしている。

校庭の掲示板や職員玄関には季節感を、廊下は研修の様子が分かる掲示物を貼る。学年掲示板はタイムリーな学習内容で常に満たされている。どの掲示板も充実した状態を保つことで、来校者や地域の方々の目に留まり、話題にあがることにつながる。それは、学校へ、職員へ、児童へと還元され、次の活動の意欲になる。

⑵職員を大切に

学校は人が創る。私は、学年主任の学年経営をサポートし、若手のリーダーを育てている。努力や成果を見付けて話題にする。校長や学年主任が褒めていたこと等、本人が気付いていない良さを伝えることで、職員同士や職員と児童が良い関係を築けるように心掛けている。職員室では児童を主役にした話をする。児童の成長は、顕著である。職員の作戦がうまくいっていることの証である。

⑶全校児童を大切に

特別支援教育コーディネーターとしては、「一人一人を大切にしよう」という意識をもつ教職員をサポートしている。支援が必要な児童や家庭について、短い時間で情報共有を行い、必要に応じて、素早く校内委員会を開いたり、アドバイザー要請をしたりしている。担任一人が問題を抱え込まないように心を配っている。難しいケースは、できるだけ早く関係機関と連携している。

⑷校内研修の充実

研究主任として、学力向上と授業力向上を目指して校内研修を進めた。市教育委員会指導主事の模擬授業やベテラン教員の示範授業を計画した。コロナ禍の工夫として、授業研究をグループで行うことにした。動画で授業を記録し、視聴できるようにすることにも挑戦した。指導主事には１グループ２授業に対し６回以上の指導をしていただいた。更に、研修便り「学びの庭」（至33号）で25人全員の授業研究の様子をまとめ、配付した。全ての指導案検討に参加し、改善点や工夫点について職員と一緒に考えた。授業研究が授業改善につながり、教員の熱意が高まった。

3　おわりに

我孫子第一小学校の歴史と伝統を守り、学校教育目標を実現していく。私は学校の中核として、職員が「自分らしく、気持ちよく」働くことのできる風通しの良い職場をつくるために、今後も意図的に仕掛けていきたい。

子供を知る

「日々笑顔」で児童と学び続ける

八街市立実住小学校教諭　寺島（てらじま）　颯汰（そうた）

初任者としての一年間を終え、新たな年度がスタートした。今年度は１学年の担任として、学級の児童と一歩一歩を共にしながら、毎日を過ごしている。その中で、特に私は二つのことを意識している。

一つ目は、「一人一人を大切にする」ということである。昨年度受け持った学級には様々な「困り感」を抱えた児童がおり、少しでもそれを解消できるように努めてきた。今年度も一人一人の児童の実態に合わせた活動や授業を行いたい。

二つ目は、「授業で勝負をする」ということである。昨年度、初任者指導の先生に指導していただきながら、学級の児童が「わかった」「またやりたい」と思えるような授業を創るように心掛けた。今年度も、学校生活の大半を占める授業が少しでも楽しいものになるよう、教材研究にしっかりと取り組んでいきたい。

昨年度、「日々笑顔」で過ごすことを児童と約束した。どんなことがあっても諦めず、笑顔で学び続けることができた。今年度担任している１年生は、小学校生活のスタートである。学習の基礎や学校生活の流れなどが身に付くよう、昨年度一年間で学んだことを生かし、学級経営や学習指導を行っていきたい。そして、児童と共に「日々笑顔」で過ごし、毎日一緒に成長していきたいと思う。

子供を知る

コロナ禍だからこそ

いすみ市立中根小学校養護教諭　菅澤（すがさわ）　美幸（みゆき）

夢の養護教諭となり、初任者として意気込んでいた矢先、新型コロナウイルスによって社会全体が様々な対応を強いられることとなった。着任直後は、一斉休校で校舎内が静まりかえる中、登校再開に向けて学校としての感染対策を試行錯誤する日々が続いた。やっと子供たちと関わることができるようになり、嬉しい反面、保健室で笑顔を見せる姿や校庭で元気に走り回っている姿を見ると、感染対策に徹しなければと身が引き締まる思いがした。これまで、マスクの着用の徹底、教室やトイレの消毒、給食の配膳方法の工夫、掲示物の作成、手洗いや歯磨きの指導等、様々な感染対策を実践してきた。その実践を通して改めて感染症予防の重要性を痛感でき、講師として経験してきたことを見直す機会にもなった。

２年目を迎えてもなお、収束の見えない日々が続いている。我慢の多かった一年を過ごし、子供たちの心の健康や生活習慣の乱れ等、懸念される問題は多くある。このような時だからこそ、子供たちが笑顔で健康に過ごすことができるように、保健室を正しい情報の発信の場、気軽に相談できる安心・安全の場として確立していきたい。そして、自分の体や心と向き合いながら成長していく子供たちを、アシストしていける養護教諭を目指し、共に成長していきたい。

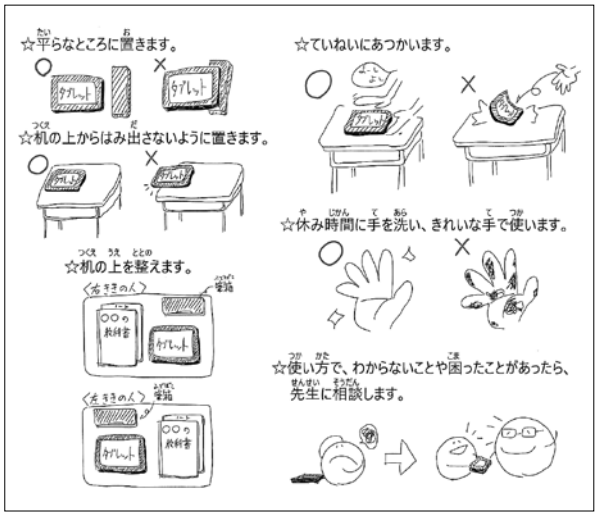
授業を創る

タブレット端末と電子黒板活用の日常化を目指して ～実践を通して感じた児童の成長～

市原市立牧園小学校教諭　阿久津（あくつ）　大貴（ひろたか）

1　はじめに

国の「GIGAスクール構想」を受けて、市原市では、昨年度県内初の全普通教室にボード一体型電子黒板の整備や、児童生徒１人１台のタブレット端末が導入され、「IChiHaRaスタイル」で、新たな学習・授業のスタイルの構築が進められている。学習・授業でのICT活用の日常化を目指すためには、どのような取組が必要であろうか。私が実践した、児童にICTを活用させる導入段階から、授業での活用までの取組、そして児童の成長を感じた場面までを紹介する。



タブレット端末の決まり（一部抜粋）

2　タブレット端末と電子黒板の活用

⑴事前指導～タブレット端末を扱う前に～

本校児童のスマートフォンを含むタブレット端末の所有率は、低学年では約30％、高学年では約70％にのぼる（令和３年１月22日現在）。しかし、所有率の高い高学年でも、日常生活でのタブレット端末の使用方法といえば、ゲームをしたり、オンライン動画を視聴したりするなど、その使用方法や頻度には偏りがあり、タブレット端末を扱うスキルには、大きな個人差があった。

そこで、朝学習の時間などを利用して、絵を描かせたり、写真（ノート等）を撮らせたり、とにかくタブレット端末に慣れさせることから始めた。また、教室でタブレット端末を使用する時に気を付けることを自作のイラストでまとめ、使い方の決まりを徹底させた。さらには、道徳の授業等を通して、情報モラル教育にも力を入れ、タブレット端末を授業中使用するまでの素地を作っていった。

⑵タブレット端末と電子黒板を学習・授業で活用した取組の例

これから紹介する実践例は、市原市のタブレット端末にインストールされている「xSync Classroom（バイシンククラスルーム）」（以下、xSync）を活用したものとなる。基本、授業中にタブレット端末を使用させる際は、教師機で授業を展開し、児童はその授業にログインしてから学習を始めた。

①ノートの提出と評価

タブレット端末活用の始めの段階として、授業で活用したノートを授業後に画像として提出させることを行った。事前に児童の名前を登録しておけば、児童の名前でフォルダ分けされるので、評価・記録していく上でも有効に活用できた。

児童のノート

②図画工作の鑑賞において

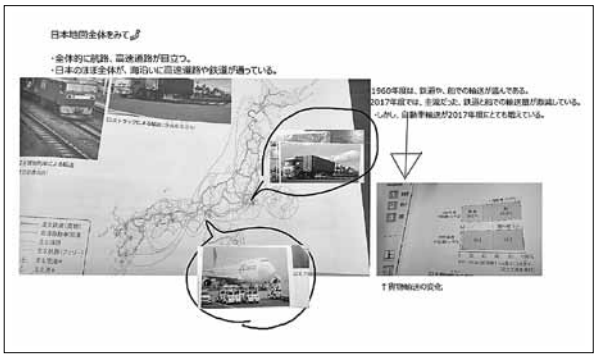
タブレット端末で自分の作品を撮影。xSyncのホワイトボード機能を活用し、自身の作品の工夫したところなどをまとめ、教師機に提出。コロナ禍の折、３密を避ける方法として、個人がまとめたデータを互いに鑑賞し合うことも行った。

児童が提出したデータ

③社会科「わたしたちの生活と工業生産」において

教師が、日本の主な交通網の地図やグラフ等の資料画像を児童機に一斉送信し、その資料をもとに児童が気付いたことや考えたことを記入してデータにまとめ、発表する活動を行った。

児童は、自分で作成したデータを、電子黒板のタッチ操作を活用しながら説明をした。発表していくうちに、自分が注目してほしいところを大きくしたり、マーカーで線を引いたり印をつけたりして、普段のノートや模造紙での発表ではできない工夫を織り交ぜながら、友達に自分の考えを伝えるためにはどうしたらよいのか、考えながら話すことができていた。

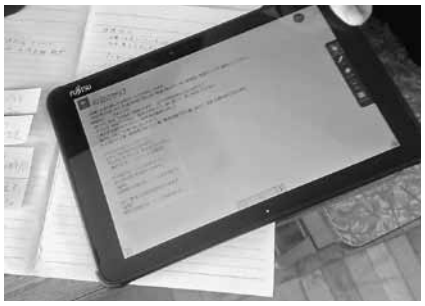


電子黒板で説明した児童が作成したデータ

また、自分が作成したデータが電子黒板に映し出されることもあってか、普段発表には意欲的ではない児童も、意欲的に自分の考えを発表しようと努力し、友達の発表も真剣に聞くことができていた。

3　私が感じた児童の成長

初めのうち、児童は私の指示通りにタブレット端末や電子黒板を使うだけであった。しかし、学級役員を中心に、自分たちの活動の中で、活用できないものかと考え始めた。すると児童は、休み時間に各自タブレット端末を持ち寄り、学級活動の準備を始めた。学級活動の進め方を考え、事前に私へ提出してくるようにもなった。その資料は、電子黒板に映し出すことで、みんなから出た意見を黒板に書く時間や、黒板の前で密になる場面を減らすことができ、その分意見交換の時間などに時間を充てることができ、活動は充実した。やらされているのではなく、自分たちで考え、学び、活動していくのだという気持ちが行動に表れている様子を見て、教師として、児童の成長を感じた場面であった。



進行内容の共有

4　おわりに

タブレット端末や電子黒板を活用すればすべてよいというわけではない。しかし、ICTを効果的に、より日常のものとして活用することで、児童の可能性は引き出される。

今後も研鑽を積み、児童の可能性を引き出す授業づくりについて考えていきたい。

授業を創る

低学年における「コーディネーション能力」と「思考力、判断力、表現力等」を育む体育授業づくり

御宿町立御宿小学校教諭　喜多原（きたはら）　直哉（なおや）

1　はじめに

みなさんは、ボールをスムーズに投げられない、走り方がぎくしゃくしている等の運動のぎこちない子供を見たことがないだろうか。原因は、都市化や少子化の進展・科学技術の飛躍的な発展等が、社会環境や生活様式を大きく変化させ、子供の遊ぶ場所・遊ぶ仲間・遊ぶ時間の減少や、交通事故、犯罪への懸念等が体を動かして遊ぶ機会を減少させているからと考えられている。このことについて私は、コーディネーショントレーニングのような脳神経系の運動能力を高める方法を低学年のうちから学ばせたい。また、学習したことを相手に分かりやすく伝えることも大切だと考えていた。そのような折、長期研修生として研究する機会を得た。ここでは、様々な基本的な体の動きを楽しく経験させることができるような低学年Ｅゲームのボールゲームの授業創りについて、研究の一端を紹介する。

2　研究のねらい

コーディネーション能力と思考力、判断力、表現力等を育む学習過程の工夫を通して、ネット型ゲームへつながる「フロアヒットボール」の学習指導の在り方を明らかにする。

3　研究仮説

⑴コーディネーション運動を基礎感覚づくりに取り入れてフロアヒットボールを実践すれば、定位能力と識別能力が育まれるであろう。また、ゲームパフォーマンスも高まるだろう。

⑵学習過程や教師の関わり方を工夫して行えば、思考が深まり、思考力、判断力、表現力等が育まれるであろう。

4　授業づくり（検証授業の実施）

⑴学習過程の工夫

１次で見通しをもたせ、２次は１対１と２対２のラリーゲームで、狙ったところへ速く転がしたり、ペアへ捕球しやすく転がしたりとボール操作の技能を高めさせた。また、ボールを持たないときの動きも指導した。３次はラリーを切り、人のいないところへ打つ２対２ヒットゲームで、どこに転がせば２人目が打ちやすく強いヒットとなるかを考えさせた。４次は身に付けた知識及び技能をもとに、ゴールラインの範囲を広げたコートで２対２ヒットゲームを行わせた。

⑵教師の関わり方

①仲間タイム・作戦タイム

３・５時間目に仲間タイム、７～８時間目に作戦タイムを取り入れた。仲間タイムは、仲間チームの良い動きを見つけ、伝える活動であり、作戦タイムは、どのように攻めたり、守ったりするか、ゲーム中の役割分担等を話し合って決める活動である。これらにより、課題解決や学習内容を相手に分かりやすく伝えるといった思考力、判断力、表現力等を育みたいと考えた。

②学習カードに関する指導

「ともだちのことをしっかりみてあげていたんだね。えらいね！」といった称賛や「どんなふうにボールをとればいいのかな？」と

いった思考を深める返事を書いた。また、２～８時間目の導入に、課題や解決方法、次時につながる技能やゲームパフォーマンスが向上するポイント等の具体的な記述を提示し、全体へ紹介した。

③学習課題・中心となる発問

毎時間、学習課題を提示し、中心となる発問を行うことで、思考を促したいと考えた。

④キャッチ・パス・ヒットのかけ声

６時間目より、仲間チームにキャッチ・パス・ヒットのかけ声を行うよう助言した。低学年の実態から、何度も説明をしてゲーム内容の理解を深めるだけでなく、かけ声をお互いに行うことで何をすればいいか判断でき、動作が身に付いていくと考えた。

⑶コーディネーション運動

毎時間、準備運動後の基礎感覚づくりに定位能力と識別能力を高めるコーディネーション運動を取り入れた。１～３時間目は、ボールを転がす動作と転がるボールのコースへ入る動作として的当て（図１）とペアで股通し（図２）を行わせた。４～８時間目は、ボールを打つ動作と転がるボールのコースへ入る動作を合わせたものとして、ペアでヒットボールキャッチ（図３）を行わせた。

図１　的当て

図２　ペアで股通し

図３　ペアでヒットボールキャッチ

５　結果と考察

⑴コーディネーション能力分析（ｔ検定）

①ゴロ捕球動作から定位能力の分析

有意な向上が見られなかったことから、コーディネーション運動は、捕球には有意に働かなかったと考えられる。

②３ｍゴロ投球動作から識別能力の分析

リリースとフォロースルーで有意な向上が見られ、識別能力が高まったと考えられる。

③５ｍゴロ投球動作から識別能力の分析

つま先・かかと・膝・リリース・フォロースルーにおいて有意な向上が見られ、的が遠い場合に識別能力が高まったと考えられる。

⑵仲間タイム、作戦タイムの発語分析

指示・助言の発語数を比較した結果、運動の知識が身に付き、具体的な助言が多く見られるようになった。

⑶学習カードの記述分析

単元序盤は、結果や課題の記述が多かったが、徐々に具体的な記述が増加したことから思考力が育まれていると考えられる。

６　おわりに

今後も、低学年のコーディネーション運動や思考力、判断力、表現力等を育むための研究は、継続していかなければならないと考える。一人一人の子供の成長を実現するために、授業を創り続けていくことが私の教師としての努めである。